

Title	William Faulkner's "Absalom, Absalom!" : Sutpenの計画の破綻が表す南部の罪過
Sub Title	William Faulkner's "Absalom, Absalom!": the evil of the old south described through the collapse of Sutpen's design
Author	成瀬, 尚孝(Naruse, Yoshitaka)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.42 (2003. 3) ,p.19- 50
JaLC DOI	
Abstract	Sutpen's motive for acquiring the status of a big planter is based on his humiliating experience in his boyhood: he was told to go to the back door by an "ape-like" black servant. It seems to readers that his final object is to get land, blacks and a big house to spend such a comfortable life, lying in a hammock and being served drinks by a black servant. He explains, however, that his definite design is not to become a planter but to accept in his house both strange, poor orphans like himself and their descendants. Thinking of his demonic behavior, we can not help doubting whether his words are true. The circumstances in which he told the design to General Compson give us a clue to the answer to this question. At that time he came home on a day's leave during the War, and visited General Compson at the office to get advice as to why his design fell short of success. The conditions were too urgent to allow him to exaggerate his story or pretend to be a good person. His story, therefore, is considered true, even though he never welcomed any orphan after his success. Another reason is that he is so much larger than life that ordinary people find him difficult to understand. People ascribe to him such different and contradictory attributes as the demonic and the philanthropic. One of the most important characteristics of Sutpen is his innocence. This is different from the quality usually seen in American literature which means that a young man has lost his purity through experiences in a dirty, real society. In this novel it signifies his strong personality: he never changes his mind once he has made a decision to do something, and in other words nothing but his death can prevent him from achieving his design. This earnestness denotes the content of his innocence. It leads him to his success as a planter, while it also forces him to fail in his design. Once he believes in the code of the Old South that planters must not have a drop of black blood, he adheres to that code to the letter and to the end. The idea he accepts innocently compels him to lose the design: he has to leave his wife and son whom he has thought indispensable for his design when he becomes aware of her faint possession of black blood, and also he can not allow Judith's marriage to Bon proposed by Henry, because of his secret identification of Bon with his son with black blood. Moreover, he deserts Milly when he finds his baby female, because he wants to get a male successor. This selfish deed makes her grandfather angry to the extent that he murders Sutpen, because he has to give up his ambition to climb a social ladder, utilizing his position as a relative by marriage. His innocence impels him to run wildly toward the achievement of his design, which leads him to death. Faulkner uses only the word "design", not "dream", referring to the aspiration Sutpen himself talks about. That is because the author does not only think that Sutpen's aim is concrete like land, blacks and a big house, not ambiguous like a dream, but also that the position of Southern planters based on black slaves is absolutely different from any dream associated with a romantic yearning. In other words, he has a sense of guilt about

	the sins of the Old South so intense that he could not use the word dream when describing Sutpen's ambition. Time is the sum of intelligence which all people who live at that moment combine. The author, therefore, makes many characters describe their thoughts about the Sutpens. That is the meaning of time in this novel. In other words, time is that Quentin and Shreve, Miss Rosa, or Mr. Compson each creates in their imagination the idea and deed of people who lived in some period. Since their imagination jumps freely here and there in time, there appears several layers of time in one scene. Because Faulkner's stream-of-consciousness technique mimics the workings of the human mind, the circumstances of the Sutpens are represented more vividly. This is the structure of the novel and the reason characters' consciousness is shown changing as they recall incidents in Sutpen's life one after another, jumping back and forth in time. Making use of this time, Faulkner tries to search for what the South is through various descriptions of a figure who accepts the Southern code and considers segregation right innocently. The Old South depicted in the story is extremely tragic and at the same time sinful, as is demonstrated by the detail that the only survival of Sutpen's descendants is an idiot with black blood. That indicates Faulkner's realization of the Old South, because he thinks that a society supported by slavery and segregation should be absurd and unacceptable. He makes an attempt to manifest not only the agony the South has experienced but also the evil of the Old South through the rise and fall of Sutpen.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20030331-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

William Faulkner's *Absalom, Absalom!*

—— Sutpen の計画の破綻が表す南部の罪過

成瀬 尚孝

序

この小説は Thomas Sutpen の成功と没落を描いている。主人公 Sutpen は少年の頃の屈辱的な体験がもとで成功しなければならないという脅迫観念に駆られる。そこで計画をたて、その達成に取りかかるが、彼の計画とはどのようなものなのか、そしてその達成に重大な係わりを持つ彼のイノセンスとはどういう意味なのか、をまず検討する。つぎに作者は主人公に成功について語らせるとき、*dream* という言葉を使わずに *design* という言葉だけを使うが、それはなぜかを考える。彼はいったんは計画を実現させるが、その後挫折する。なぜ彼は手中にした成功を維持できないのか、その理由を調べる。そして彼の失敗の意味を考え、最後にこの作品の意図を探ることを本論は目的とする。

I. Sutpen の計画とイノセンス

Faulkner が主人公の成功と挫折をとおして描こうとしたものは南部の歴史であり、その根底にあった人種問題である。作者は登場人物たちに Sutpen 一族の出来事をそれぞれ語らせることによって、主人公はいうまでもなく彼ら一族の像を創り上げようとする。しかし、「個々人には真実は見えないと思う。…真実を見ても、その一面を見るにすぎない」と著者がいうように、登

場人物たち一人ひとりでは完成された Sutpen 像を創りあげることはできない。¹ 彼らはそれぞれ自分が見聞したことを話すために、ある出来事についていくつもの見方が語られ、その結果内容に齟齬が見られるからである。まさしく Faulkner がいつていることだが、「…この老人 [Sutpen] 自身は少しばかり大きすぎる人物だったので、Quentin, Miss Rosa や Mr. Compson と同じような普通の人たちはみな、一度に彼を理解することができなかった」のである。² しかし、「だれも完全な真実を理解していなくても、すべてを繋ぎあわせてみると、真実はみなが見たもののなかに含まれている」ことが分かる。だから、反復される複雑な出来事のなかから、「あるがままに主人公を理解するにはより賢明なあるいは…もっと思慮深い人物」の力を借りなければならぬ。⁴ その役割を与えられたのが、Quentin と Shreve という若い知的なハーヴァードの学生である。二人の想像力によって紡ぎだされたこの物語はだいたいつぎのように単純化できる。

ヴァージニアの山奥に生まれた Sutpen は家族と共に、州の低地方に移住する。あるとき父親の使いで行った農場主の屋敷で、猿のような黒人の召使から玄関ではなく裏口に回るようにいわれて、激しい屈辱感に苛まれる。理不尽な扱いを受けないようにするためには、あの農場主と同じ身分を獲得しなければならないと彼は決意して、成功の機会が多いといわれる西インド諸島へ渡る。そこで奴隷の叛乱を鎮圧した功績が認められ、彼がその下で働いている農場主の娘と結婚して、息子をもうける。しかし、息子が生まれてみて初めて妻に黒人の血が混ざっていることを知り、彼は自分の計画に合わないという理由で妻子を離別する。

その後彼はミシシッピ州の Jefferson に現れ、そこで苦闘しながら農場主への道を歩みだす。彼は町で尊敬されている家の娘と結婚し一男一女をもうけ、やがてその地で最大の農場主になる。その成功のさなか、息子が大学の友人を伴って家に帰ってくる。息子はその友を愛し、妹を彼と結婚させようとする。だが、Sutpen にその結婚を反対されたために、父親と大喧嘩をし、相続権を放棄して友人と家を出る。その頃南北戦争が始まるが、二人は兵士とし

て、父親は将校として戦場に赴く。友人は自分を息子と認めようとしない父親 Sutpen への反発から、その結婚に踏み切ろうと考えるようになる。一方、息子は野営地で父親に会い、彼の反対の理由がその友人にすでに子供までなした黒人の愛人がいるからではなく、友人に黒人の血が流れているからだを知る。そして息子は結婚に反対するようになり、どうしても結婚するという友人を射殺して逃亡する。

Sutpen は戦争から帰還して跡継ぎを失ったことを知り、亡くなった妻の妹に求婚する。そのとき、彼は男の子を生んでくれるように頼み、男児が生まれたら結婚しようといって相手を怒らせ、結婚を拒絶される。その後彼の農場で働いている貧乏白人の孫娘に子供を生ませるが、それが女の子だと知ると彼女を捨てる。怒ったその貧乏白人は主人公を殺害する。Sutpen の子供たちも次第にこの世を去り、最後に彼の血を受け継ぐ子孫のうち生き残るのは白人と黒人の血が流れている白痴一人だけとなる。この精神遅滞者は最初の結婚で生まれた主人公の息子の孫にあたる。

以上がこの小説のだいたいの内容だが、農場主になるという計画を実現しようとした主人公がこうした悲劇的な結末を迎えるのは、成功を手中にしようとする彼の考え方のどこかに問題があったからではないかと推定される。そこでまず、彼が計画の実現に駆り立てられた理由から検討していくことにする。

主人公に農場主を志させた直接的な理由は、大邸宅の玄関先で黒人から受けた侮辱のためである。だが、一家が山奥を出てからその屈辱的な瞬間にいたるまでの彼の人生には、悲惨な出来事が多い。兄二人は家出をして消息が知れないこと、姉の一人は旅の途中で父親の分からない子供を生んだこと、泥酔した父親が酒場から牡牛のような黒人にとうもろこし粉の袋のように担ぎ出されたこと、姉と二人で道を歩いていると、黒人の御者に道を空けるようにいわれて、馬車が巻き起こす砂埃にまみれたことなど、既に彼のなかには家族や社会に対する憤懣が溢れている。その憤りを爆発させたのがあの農場主の屋敷の玄関で猿のような黒人の召使いから裏口へ回れといわれた出来

事、つまり「少年の象徴」となる事件なのである。(261)

主人公は貧乏白人というすでに敗者となっている彼の人生に明確な目標を持つことになる。それは屈辱を晴らすためにあの黒人や農場主に報復することである。しかし彼は侮辱に苦悶しながらも、13、4歳に過ぎない少年にしては、冷静である。黒人の召使個人に復讐しても意味がない、それよりは黒人に無礼な応対をするように指示した農場主のほうが問題である、と彼は考える。相手と戦う場合その相手と同じ性能をもつ武器を持たなければ、戦いにならないと山奥に育った主人公は、ライフル銃という解りやすい比喻をもとに考えを進める。その結果、彼は相手と対等の身分を手に入れなければならないと判断して、「土地と黒人と立派な邸宅」を獲得しようと決心する。(238) 彼の決意は恥辱をもとにして心の内奥で固められただけに、その計画はなにがあっても実現されなければならないものとなる。

こうした冷静な判断ができるのは彼がイノセンスという資性を備えているからである。「そのイノセンスが、他人が話しているみたいに冷静に、ライフル銃の比喻を使ってこの問題を処理するように彼に教え」るのだ。(238) それは、思わず絶叫してしまうほどの屈辱の体験のなかで、彼が突然意識したものであり、「果てしない平原に記念碑のように屹立している厳しいくらいに完璧な形をしていた」のである。(238) つまり彼のイノセンスとは、あの恥辱的体験のなかですべてが崩れ去った後に残された、絶対に変ることのない根源的な彼の本質のことである。それは、屈辱によって彼の心の奥底で意識されたものであり、いったん決心したら変更は許されない断固とした厳格さを持つ。それがあつた対象にむけられたとき、ひたむきな、頑ななまでの、その意味では純真な、なにかを追求する姿勢となる。彼のイノセンスは、Cleanth Brooks が論じていることだが、アメリカ文学によく見られる、純真な年若い主人公が最初は持っているが、社会へのイニシエーションの儀式を経ることによって失われる資質とは異なっている。⁵

主人公について祖父が語った話を父親から聴いた Quentin は、つぎのように話す。

Sutpenの問題はイノセンスだった。突然彼は、自分がしたいことではなくてただしななければならないこと、望もうと望ままいとしなければならないことに気づいた、なぜならもしそれをしなければ、これからの人生で彼自身にも、彼のあらゆる先祖が彼の内部に後の世代に伝えるようにと残していったものにも、彼がそれをきちんとしようとしているかを見守っているすべての死者たちにも、顔向けができないと彼には分かっていたからだ……それがなにか彼が分かったその瞬間、それは彼にはあまりにも思いがけないことだと彼は理解した、というのも彼は、14歳くらいになるまで、それをしなければならないことを知らなかっただけでなく、そんなものがこの世にあってしてほしいとか、する必要があるとか思われていることを知りさえしなかったからだ。(220)

ここで言及されている彼のしなければならないこととは、その恥辱を晴らすために報復しようとする、つまり農場主の地位を獲得しようとするものであると考えられる。というのは、このパラグラフの後に彼の一家がヴァージニアの低地帯へ移住していくときの悲惨な生活とその後に農場主の大邸宅の玄関で黒人の召使に裏口へ回れと追い払われる屈辱の場面が続くからである。とすれば、彼のイノセンスが問題であるということは、その計画の遂行にあたって、彼がひたむきで、頑なで、限りなく純粹であるために、その計画は挫折せざるをえないという意味に解釈できる。別の言い方をすれば、計画の達成以外は彼の眼中にないという偏執的な執着心が彼のイノセンスの問題ということなのだ。

彼の計画達成への道は、彼がたまたまある冬三か月間通った学校で西インド諸島の話を生から聴いたことに始まる。そこは、賢くて度胸があれば、方法は問題でなく、貧しい男が金持ちになれる所だと教えられる。そのとき彼は、「度胸は持っていると思っていたし、賢さは努力と経験を積み、活力と意志によって身につけられるものなら、私にも習得できるはずだと信じていた」と語る。(242) 彼はイノセントであるだけに、賢さと度胸によって金を

手に入れられると固く信じて計画の実現にのり出す。

その後の人生で、彼が成功を勝ち取とうとする行動には、賢さはべつにしても、度胸が重要な役割を果たしていることが分かる。西インド諸島で奴隷の反乱を押さえ込んだのは彼の勇気であり、その結果農場主の娘と結婚できるし、またその島から連れてきた黒人たちを彼が自由に扱えるのは、素手の闘いによって力を誇示できたからである。そしてインディアンの酋長から広大な土地を手に入れられるのも、あるいは Mr. Coldfield の信用を利用して屋敷の家財道具一式を獲得するのも、冒険的な賭けをおこなう度胸のためなのだ。さらに、「彼を Miss Rosa と婚約させたものは、賢さというよりも、意志というよりも度胸だったのだろう」ということだ。(278) 彼の軌跡は計画の実現にわき目もふらず度胸によって突き進んでいることを示しているが、それを支えているのが彼のイノセンスなのである。

彼の計画の中身は、「それを達成するには金と、邸宅と、農場と、奴隷と、家族——もちろんそれに伴って妻が必要でした」と彼が述べているように、はっきりしている。(263) それらを獲得しようとした理由はただ一つ、少年時代の彼を侮辱した農場主に対抗するためだったはずである。だが、後に彼はそれを「驚愕し、絶望した少年の作り話だった」と否定し、計画を実現しなかった本当の理由を以下のように General Compson に説明する。(261)

いま私は、その少年が白い扉の前に立ってドアをノックする必要が二度とない所へその少年を受け入れてやりたい、ただ保護するためではなく、その少年が誰であれ名もない見知らぬ少年でも、その子が知り合いのすべての人たちに背を向けて永久に扉を閉め、彼の（その少年の）名前さえ耳にしたことのない彼の子孫たちが、生まれるのを待っていた夜明け前の光を待ち望むことができるようにしてやりたいのだ、その時彼自身の（Sutpen の）子供たちとまったく同じように、その少年の子孫たちが悲惨な状態からかつて永久に解き放たれたのだということを知る必要がないようにしてやりたいのだ—— (261)

彼が成功したいと思ったのは、かつての彼自身のような少年が彼の邸宅の玄関に来たら受け入れたいからだったのだ。Dirk Kuyk, Jr.が指摘するように、Sutpen が計画を実現しようとしたのは、南部名家を確立するためではなく、名もない見知らぬ少年がやって来たら黒人の召使にその少年を追ひ払わせるかわりに、その少年を迎え入れ、その子の子孫まで面倒をみようとしたためなのである。⁶ 確かに、上記の引用文に見られるように、主人公の意図はそれとおりののであるが、そうすると彼が突然不幸な子供を思いやる善意の人物に変わってしまう違和感を覚える。

もともと彼はイノセントであるだけに計画の実現だけを目指して生きてきた。最初の妻に黒人の血が流れていると知ると、十分な配慮をしてはいないが離婚している。彼の屋敷を建てたとき、フランス人の建築家に逃亡しなければならないほど過酷な労働を強いている。まだ20代の後半で、自分の娘よりも若いMiss Rosaに男の子が生まれたら結婚しよう、と59歳の男が平然としていえるほど、彼は厚顔で冷酷である。また、彼の雌馬が雄の子馬を生んだことを知ると、彼の女兒を生んだばかりの、Wash Jonesという貧乏白人の孫娘に、「なあMilly、お前も雌馬でなくて残念だ。そうなら、既にちゃんとした囲いをおまえのために作ってやったのに」と、彼女を侮辱する。(286) Sutpen像を創造しようとする過程で、客観的な立場にいるShreveが何度も彼のことを「the demon」と呼んでいることから、彼の悪辣さが分かる。⁷ 何より、彼は息子が大学に通う頃には、「郡で最大の地主で、綿花農場主になっていた」が、見知らぬ少年を彼の邸宅に迎え入れたという事実はない。(72)

こうした彼の冷酷で利己的な行為と、見知らぬ少年とその子の子孫まで受け入れようとする博愛精神とはどのように係わっているのか。もしまったく無関係だとすれば、その発言は彼の唯一の親友であったGeneral Compsonに対して自分を美化したかったからではないかという推測が成り立つ。だがそんな余裕は彼にはなかったはずだ。というのも、彼がその親友を訪れたのは、戦時下に一日の休暇で一時帰郷していたときだからだ。その慌しさのなかで、たんに自慢話をするために親友を訪問するというのは不自然である。そうで

はなく、なにか重要な話があったのだ。事実、彼はそのとき自分の計画がどこで間違っていたのか、それを親友に指摘して欲しいと痛切に思っていたのだ。今度こそ彼の計画は彼の年齢を考えると失敗は許されないからだ。その原因を突きとめようとしていた以上、彼は計画を飾るはずはなく、事実を話さなければならないことは分かっていたはずである。こう考えると、やはり彼がどんなに冷酷な、悪辣な行為によって農場主になろうとし、その身分を保持しようとしたとしても、見知らぬ少年を受け入れようという計画は彼の真意であったと考えるほうが妥当である。

とすれば、この二つの矛盾する考え方を彼が違和感なく持つことができる理由を説明する必要がある。彼にはなにものにも優先して計画を遂行しなければならないという思いがある。そのひたむきで、頑なな考え方を彼にさせるのは、前に述べた彼の重要な資性であるイノセンスである。この資質のために、彼は目標だけを見据えて、どのような手段をとろうとまったく気にかけないという生き方をしてきたのだ。「Sutpen の問題はイノセンスだ」と General Compson が指摘したように、他人から見れば問題であっても、彼にはその意識はなく、自分は正道を歩んでいるとしか考えなかったのではないか。だから、彼は自分の行為と理想との落差に矛盾を感じることなく、平然とその両者を心のなかで併存させることができるのだ。Faulkner が彼は普通の人を理解するには少しばかり大きすぎる人物だと言うのは、こうした点のことを指しているのだと考えられる。

II. “design”であって、“dream”ではなく

Sutpen は独立独行人である。彼が農場主になろうとして、その計画の達成に邁進する姿は、19世紀のアメリカでよく見られたアメリカン・ドリームを追った人たちに重なる。彼の成功への道は後のアメリカで悪徳資本家 robber baron が他人を踏みにじって財産を築いたやり方を彷彿させる。彼が行った西インド諸島でも「金を手に入れるには死の危険性が高く、ドル金貨は

金そのものではなく血によって輝いていた」といわれるほど、富の獲得には死の覚悟が必要だと思われていた。(250) こうした危険を冒してまで彼がしたことはまさしくアメリカン・ドリームの達成にはかならないが、作者は主人公に成功を語らせるとき、他の登場人物の場合と違って、*dream* という言葉をいっさい使っていない。主人公が追及したものは *design* であって *dream* ではないというわけである。

Faulkner はこの小説で *design* という言葉を 29 回使っている。そのうち二回は Bon の母親の弁護士と Henry がそれぞれ計画について述べる際にこの語を用いているが、その他はすべて主人公が自らの目的達成について話すときに *design* という言葉を使っている。一方 *dream* は、全部で 22 回用いられている。⁸ そのなかでアメリカン・ドリームという限られた意味でこの語が使われるのはわずか四回で、いずれも他の登場人物、Miss Rosa が三度、Shreve が一度、主人公が狂ったように成功に向かっていく姿を描くために *dream* という言葉を用いている。

なぜこの二つの言葉は使い分けられるのか。主人公が西インド諸島へ行こうとしたとき、彼は「易しいものは何も信じられなかっただろう」と General Compson が指摘するほど前途に不安を抱いていた。(244) だから彼は漠然としていて、憧れを伴う、実体のない夢のようなものではなく、手ぢかにあって実現に乗り出しやすい対象にまず目を向けたはずである。彼が目指すのは、はっきりと形のあるもの、始めから獲得しようと思っていた「土地と黒人と立派な邸宅」であって、その上で貧しい見知らぬ少年を受け入れようという願いが伴っていたとしても、それは少なくとも彼には夢ではなく現実のレベルの問題として捉えられていたと考えられる。だから、あとはただそれを手に入れる計画をたて、実行に移すだけでいいのだ。主人公も計画だけを追い求めればよいように、愛のような人間的な感情が入り込むことのない、実務的、現実的な性格を与えられている。しかも、西インド諸島へ出発する際には、成功するために必要な考え方さえ教えられる。賢明で勇気があれば、方法を考える必要はなく、金持ちになれるというのだ。そこに見ら

れるのは、あくまでも具体的なものであって、夢の追求のような漠然としたものではない。

一方他の登場人物たちは、普通感覚で成功という言葉をつえ、主人公の成功には夢の要素が伴わないことを主人公ほどに意識しない。そのため、なにげなく *dream* という言葉が使えるのである。主人公が成功を即物的に捉えているのに対して、他の登場人物たちは自分たちには叶わぬこととそこに憧憬を抱く。その意識の差が主人公の成功の原動力になっている以上、二つの言葉の明瞭な使い分けが必要なのである。だから、著者は主人公の目的達成に *dream* ではなく *design* という言葉を選んだのだ。

もう一つの理由として、Faulkner 自身の黒人問題についての考え方がこの言葉の峻別した使い方のなかに明瞭に表されていることを挙げることができる。西インド諸島のハイチは13年間におよぶ奴隷革命運動によって1803年にフランスから独立を勝ち取っている。この独立運動は *Sutpen* が西インド諸島へ行くおよそ20年前のことであるが、この小説にも描かれているように、そのときでもまだ影響力を強め、その地域の住民に叛乱を引き起こす勇気を与えていたといえる。奴隷制度を不条理とする Faulkner は、主人公の農場主としての成功が黒人奴隷を使うという、他人を踏みにじった手段でしか成り立たない以上、彼の行為を表現するのに *dream* という言葉が不適切だと考えたのではないか。たとえ西インド諸島の *Martinique* 島で主人公が後の成功の基盤のすべてを手にしたわけではないにしても、彼の有能な黒人奴隷の例に見られるようにその一部を獲得していたことは、間違いのない事実だからである。西インド諸島は「落伍者や敗残者が最後にやけになって荒れ狂うための、暴力と、不正と、流血と、人間の貪欲と残酷という悪魔的な欲望のための舞台として神が創り、顧みなかった場所」なのだ、と作者は *General Compson* に語らせている。(250) そうであるなら、なおさら地獄のような所で成功への第一歩を印した主人公の行動は絶対に *dream* という言葉には結びつかないと作者は考えていたといえる。だからこそ主人公が西インド諸島へ行こうと決めた日と砂糖きび農場主の屋

敷に閉じこもって奴隷と戦った夜までの六年間そこで何をしたのか彼はまったく話せないのだ。それは口にするのをはばかりほどの残酷な行為であったに違いないからである。その後 Jefferson における主人公の行動はその延長線上にあり、さらに黒人奴隷に依存度を高めていくのであれば、その成功を表現するのに dream という語は使えないという作者の考えは一層強められたはずである。

アメリカン・ドリームを追求する過程で倫理に反する行為を行わなければならないことと、もともと人を人として遇することのない奴隷制度を富の蓄積の基盤にしていることとは、本質的に異なっているのである。だから作者は Sutpen が農場主への道を語る場合最もふさわしい言葉として design という文字を使ったのである。

III. 「計画」の破綻

主人公が農場主の地位を守れなかったのは、黒人についての考え方に問題があったからである。もちろん当時の南部農場主は彼と同様の考え方をしている人たちが圧倒的に多かったが、その考え方が原因で彼のように破滅した農場主は存在しなかったといっている。彼の問題は、貧乏白人であったために彼のほうが彼らの考え方を無条件に受け入れたことである。作者が指摘していることだが、主人公の問題点は「ある人物の財産とまったく同じようなうわべを飾るもの、つまり大邸宅やそこにいる召使を手に入れることで、私はその人物が自分のことを立派だと思っているように、私自身を立派にするつもりだ」と彼が考えていることだ。⁹ そこには所有の対象としての物があるだけで、人が生きていく上で必要な「良識、信義、同情、哀れみ」といった倫理観や人間的感情が欠如している。¹⁰ だから彼は運命に見放されたのだ。

Sutpen は、南部名家を確立しようとするとき、南部社会が要求する基準はすべて満たさなければならないと考える。「社会が黒人は白人より劣等であ

と思うのなら、立派な名家が黒人ということはありません。社会が黒人の血が少しでも入っていれば完全な黒人だと見なすのなら、夫にも妻にも黒人の血が少しでも入っていることはありません。社会がたとえばオリヅ色の肌とか黒人であるという噂でさえ怪しいと思うのなら、立派な名家はそうした疑わしい土台の上に成り立つことはありません。そして女性——また男性——の純潔がとりわけ賞賛されるのなら、もっとも立派な名家を築く男性は童貞のままでいることになるだろう。」¹¹これが、Dirk Kuyk, Jr. が指摘するように、主人公が受け入れた南部社会の規範なのだ。そのため彼は「それ〔最初の結婚までは彼が童貞であったこと〕もまた私が心に抱いていた計画の一部でした」というのである。(248)

Noel Polk やその他の研究者たちは主人公の童貞の問題に疑問を投げかけているが、とくに Polk は興味深い考えを示している。彼によると、それは主人公の問題ではなく彼の妻のほうの問題であり、生まれた子供がほかの男の子供であったから、彼は妻子を捨てたというのである。そう考えると、その後の展開について人種問題だけではない多様な解釈が成り立つと Polk は主張する。¹² この作品は奥行きが深いから、確かにそれは一考に価する主張であるが、そうすると男女間の、夫婦の問題になってしまつてこの小説の主題と離れてしまうのではないか。何よりも作中で主人公が、童貞であることは計画の一部だと明言しているのだから、つまり女性の純潔が望まれるのなら、男性も童貞のままでいることが大切だとイノセントに信じているのだから、それを素直に受け入れるほうがこの作品本来の解釈に役立つと考えられる。

主人公は人生の三つの重要な段階で判断を誤ったために計画を挫折させることになる。最初は西インド諸島の Martinique 島で農場主の女婿となり、彼の子供が生まれたときである。彼はその子供に黒人の血が混ざっていることに気づくと、自分の計画に妻とその子は合わないという理由で結婚に終止符をうつ。離婚について彼は自らの正当性をこう主張する、「自分の卑しい素性やとばしい持ち物については隠さず話したのに、相手には隠しご

とばかりか嘘があり、しかもその嘘は彼の計画全体の核心をいつの間にか無効にし駄目にしただけではなく、過去に彼が苦しみ耐えてきたすべて、さらにその計画にむかって将来成し遂げるすべてを皮肉にも錯覚にしてしまうようなひどい性質を持っていたのだ」と。(262-3) しかも別れるとき、彼は妻子が十分暮らしていけるように配慮して財産にたいする自分の権利を放棄し、20人の黒人だけを受け取ったというのである。しかしそれは彼自身認めていることだが、無理やり良心を納得させた結果なのであって、General Compsonがいつているように、「そこ〔計画を推し進めること〕には良心はまったくなかった」のである。(262) 彼は名家に黒人の血は一滴たりともは入っていないという南部社会の規範を受け入れており、それにあくまでも忠実でなければならないと考える。彼はイノセントだったから、いったんことを決めたら、それを最優先にして他には目を向けず、ひたすら目的を追求することになる。だから彼にとって、離婚は良心の問題が入りこむ余地がまったくない、当然の帰結なのである。だが、これが彼の計画を破綻させる要因となる。

二度目は彼が農場主としての地位を確立し、南部名家を繁栄させようと努めていた時である。父親の話聞いた Quentin によると、Sutpen は息子 Henry が最初の手紙で Charles Bon という友人の名前を知らせてきてから、そんなことはありえない、皮肉にも限度があると思っていたということだ。だがその友人が訪ねてきて息子に紹介されたとき、彼は自分が間違っていたことを知り衝撃をうける。「彼はあの計画——邸宅、地位、子孫などすべて——が煙でできていたように音もたてず、突風も引き起こさず、残骸さえも残さずに崩壊するのを感じ耳にしたに違いない」と Quentin はそのときの Sutpen の気持ちを推測する。(267) 一方そのときの Bon の思いを、後に Shreve は Quentin との対話のなかで、こう説明する、Bon は Sutpen がまったく動揺を表さなかったから、逆に相手が自分の顔に真実があるのを認めたことを知ったのだ、と。つまり Sutpen は父親だったから、しかも Charles Bon という名前までつけた父親だったから、Bon が最初の結婚で生まれた自分の息子だと

すぐ分かったというのである。一方息子のほうも Sutpen を父親だと確証はないが思ったというのだ。それでも Sutpen はこうなったことを「天罰とも、父親の身から出たさびとも、運が悪かったともいわずにただ間違いだといった」と伝えられている。(267) そこにも彼特有の初志貫徹の姿勢が見てとれる。だから彼は農場を守るために防御態勢をとる。それはその事実を知らない正嫡の息子 Henry が友人と妹の Judith を結婚させようとすることに反対することである。

この小説の最も重要な主題は Sutpen がその結婚に反対する理由である。それは息子が結婚を成就させようと努力する過程でしだいに明らかになってくる。最初問題だと考えられていたものは友人の重婚であったが、つぎにはそれが近親相姦にかわり、さらにそれに加えて黒人の血というように問題は当時の社会の基準から見ればしだいに深刻化していく。Henry はこの結婚に反対する父親に反抗するために、父親の農場にかんする権利をいっさい放棄する。そこまでしてこの結婚を成立させようとした Henry が認めることができるのは、最初は悩んだ末の重婚までなのだ。それから近親相姦の問題が明らかになって、さらに苦悩してそれにもまた譲歩するように自分を納得させる。その理由は、彼が妹を愛しているから、Bon に自分を投影して異母兄が妹と結婚することは自分が妹と結婚することだと考えることができるからである。¹³ さらにいえば、彼は異母兄をまた愛していたから (89)、彼らの結婚に反対しようとはしないのだ。それどころか戦場に行った最後の段階になると、むしろ積極的に応援さえしている。その彼が結婚を阻止しようと決心したのは、野営地で父親から Bon に黒人の血が流れていることを打ち明けられたからである。それは彼には許せないことなのだ。

Henry は南部農場主の家でその跡継ぎになるように育てられた。幼いころ父親が素手で黒人と格闘するのを見せられたり、彼自身も同じ年頃で体重も同じ黒人の少年と闘わされたりしたことが示すように、彼にたいする父親の教育方針は厳しかったと考えられる。しかも Sutpen には、その地域で過去という歴史の重みをもたない新参者であるという意識があるから、いっそう社

会によく順応するように息子を鍛えたはずである。当然 Henry は黒人についての南部社会の考え方を父親以上にごく自然に身につけていたと考えられる。それは異母兄にたいする愛よりも強い、抑制できないほどの意識であったから、彼は Bon を許せなかったのだ。彼にとって妹をその結婚から守ることは、彼女のヴァージニティだけではなく南部農場主のあるべき姿を守ることであるという意味を持っているから、彼は異母兄を殺さざるをえないのだ。

しかしそれほど強い人種差別意識が Sutpen 一家にあるとすると、彼の黒人の娘 Clytie と彼らの親密な関係をどう説明するかという問題が残る。なにしろ、Miss Rosa が顔をしかめるほど仲良く彼ら兄妹は一緒に育っているからだ。その理由は、親密ではあっても Judith と Clytie のあいだにはそれなりの処遇の違いが見られる以上、Sutpen が黒人の娘をこれ以上差別する必要を認めないからである。つまり農場主としてあるべき姿も地位も彼女を育てることによって損なわれることがないのである。¹⁴ ところが最初の結婚で生まれた息子 Bon を受け入れるとなると、事態は変わってくる。黒人の血が入っているが白人として通る Bon を、たとえ正嫡でないにしても、息子と認めることは長子相続制をとる南部社会では将来の紛争の種を残すことになるという危惧が Sutpen にはあったと考えられる。また黒人の血が混ざった息子を受け入れることは、南部社会の規範を守ろうとする Sutpen には良心の問題として絶対にしてはならないことに思えたのだ。そこが Clytie を受け入れることと根本的に異なる点なのだ。それに Sutpen には自分が重要ではないと考えることに関しては、たとえ人種差別についてであってもその行為に矛盾した点が見られるのである。だから Clytie は Bon とは違って、差別を受けないでいられるのだ。それもまた作者が、普通の人が理解するには彼が大きすぎる人物だと説明していることの意味なのだ。

つぎに、その結婚にたいする Sutpen の対応について考えてみなければならない。それは彼が General Compson に語ったつぎのような言葉、祖父の話を父親から伝え聞いた Quentin が伝える言葉のなかに見てとれる。

だが私はいま二度目の選択の必要に迫られています、そしてその奇妙なところは、あなたが指摘してくれて最初私にもそう思えたのですが、新しい選択が必要になったということではなくて、私がどちらを選択しても、どちらの道を選んでも同じ結果になるということなのです、つまり私が切り札を切らなければならない場合に、起こることなのですが、私自身の手で私の計画をつぶしてしまうのか、それともなにもしないで、ことの成り行きを私には分かっている方向に進ませて、世間の人たちの目に私の計画がごく普通に自然にうまくいっているように思わせるか、のどちらかなのです、でもそれは50年前あのドアにやって来て追い払われたあの少年を嘲笑し裏切るようなやり方だと私自身の目には映るのです、あの少年の汚名をそそぐためにすべての計画が考えられ、この選択、最初の選択から受け継いだこの二度目の選択をする瞬間へと進められてきたからです…

(273-4)

Sutpen は、「切り札を切る」つまり Bon に黒人の血が流れていることを明らかにすることによってこの結婚を認めないで、自分の計画を破綻させるか、それとも成り行きにまかせることで、結婚をだめにして自分の計画を挫折させるか、その両方の対応の仕方があるが、いずれにしても結果は同じだという。結婚の峻拒は農場の後継者である Henry を、もうすでに相続権を放棄している彼を永遠に失うことを意味しているから、計画の破綻だと Sutpen は考える。彼が実際に採った方法は何もせずにすべてを Henry にまかせることである。だが、そこには悪意が認められると Shreve は Quentin につぎのように指摘する、「それからこの悪魔は近親相姦の恐れが生じると、態度を完全に变えて屋敷から娘の婚約者と息子を追い払うだけでなく、彼（息子）に激怒する父親の代わりに拳銃を撃つ役目を果たすように、息子を墮落させ、誘惑し、唆せなければならない」のだ、と。(179) Sutpen は例のイノセンスをここでもまた発揮して、最初の段階からそれを冷静に実行していたのである。そしていよいよ戦局が最終段階にはいつてまだ二人が生きていると知ると、

彼は夜わざわざ Henry が所属する部隊の野営地をおとずれ、Bon の秘密を息子に話した、と Quentin と Shreve は想像する。つまり Sutpen は、Henry が考えるのと同じように、戦争が息子か Bon かあるいは二人とも死なせることで、この厄介な問題に決着をつけてくれると初めのうちは考えていたにちがいない。だが、そうはならなかったから、最初の選択肢である「切り札をきる」方も最後には選ばなければならなかったのである。彼は息子の性格を熟知しているから、その切り札に Henry がどう対応するか分かるのだ。彼が戦後農場に帰還したとき、Clytie から息子が Bon を射殺して逃げたと聞いても、しごく平然としていられるのは、その事件が彼の予測していたことだからである。そのとき彼の頭にあるのは、農場をどう立て直すかということだけなのだ。ここでも彼は度胸と賢さでその計画に立ち向かおうとする。その冷酷さ、無慈悲さのために彼は悪魔といわれるのだが、それもまた彼のイノセンスのなせる業なのである。

では Bon は Sutpen と Judith のことをどう考えていたのか。まず Bon は Sutpen が父親だと本当に知っていたのかという問題がある。というのはこの小説のある時点で「Bon は Sutpen が父親であると知っていたかどうか誰にも分らない」と Quentin が指摘しているからである。(269) 確かに、この小説にはそれが事実として述べられていない。最後になって Quentin と Shreve の想像のなかでやっとこの問題が解決されているのである。そこで Bon を理解するためにこの問題から考えていかねばならない。

この問題にかんしては Elizabeth Muhlenfeld がつぎのような優れた考察をおこなっている。それによると Judith は立派な女性であり、その彼女が、Henry と Bon が帰還したとき、ウェディングドレスを縫っていたということは、Bon との結婚にはっきりとした根拠があったはずである、と論拠を示して、その主張を Bon が彼女に送った手紙をもとに論証していく。そこには書き手と読み手の間の相互に愛と理解が共有されていることが示されているばかりか、書き手の正しい歴史観やユーモアまでが読み取れる。これほどの手紙が書けるのは、Bon が近親相姦や異人種間結婚など絶対に犯すことのな

い人物であることを明瞭に物語っている。だから彼は Sutpen が父親であることを知らないのだ、と論者は主張している。¹⁵ 非常に説得力のある論文である。

一方 Faulkner は、Bon は Sutpen が父親であることを知っていたと思う、といている。¹⁶ どちらが正しいのか。作者がかならずしもほんとうのことをいうとは限らないが、またこの手紙がいつ書かれたかという時間的制約をつけずに、作品全体からこの問題を判断すると、やはり Bon は父親が Sutpen であることを知っていたという Faulkner の考えのほうに妥当性があるといえる。

そう考える根拠を二つ挙げることができる。まず、Bon はその手紙を書いた時点でその事実を知らなかったということである。それは Quentin と Shreve が二人で想像する野営地の場面で示されている時間的な順序によって明らかだからである。そこで Henry が Sutpen に会ったとき、Henry の考えとして「彼 [Henry] は Judith がたしかにあの手紙のことを彼 [Sutpen] に手紙で知らせなかったとも、Charles が彼女 [Judith] に手紙を書いてきたと彼 [Sutpen] に知らせたのが Clytie だったとも思わなかった」と表現されているが、この手紙とは Bon が Judith に送った手紙のことである。(353) つまり、Henry が野営地で Sutpen に会う前に Bon が Judith に手紙をだしたことが明示されているのである。そしてそれに続く場面で Sutpen は Henry に Bon の母親には黒人の血が入っていると話したのだ。その後で Henry は Bon に妹との結婚を止めるように説得するが、あくまでも抵抗されたから Henry はその秘密を彼に告げざるをえなかったのだ。だから Bon が自分の出生の秘密を知るのは、Judith に手紙を書いてからしばらく時が経過した後のことなのである。Bon の手紙がすばらしいのはそのためである。

つぎに、Quentin が Miss Rosa と一緒に Sutpen 屋敷へ行きそこで体験したことによって、Bon が自分の父親は Sutpen だと知っていたという根拠にすることができる。Quentin はそのときの自分の興奮しきった異様な様子をつぎのように思い出している、「彼は 20 歳だった、怖くはなかった、というのも彼

がそこで見つけたものは彼に危害を加えることはないだろうから、でも彼は走った、暗い見慣れた家のなかでも片手に靴をもったまま、まだ走っていて、階段を駆け上がると、自分の部屋に入り、急いで、汗をかきつつ、荒い息をしながら、服を脱ぎ始めた」と。(372) それは彼がその邸宅の二階の部屋でこの物語の登場人物のひとり、Henry に会って言葉を交わしたからである。もちろんこの場面でも Bon の秘密については触れられていない。しかしその出生の秘密をこの物語のなかで知っているのは、当事者である Henry をのぞけば Quentin だけであって、彼がその秘密に接する可能性が最もたかいときは、この折だと考えられる。彼の異常な取り乱し方は、衰弱してベッドに横たわる Henry に会って単に話を交わしたことだけでは説明のつかない、もっと彼の心を揺さぶるなにかがあったと考えるほうが分かりやすい。そのなにかとは、Bon に黒人の血が混ざっていたから、彼と妹の結婚を阻むために彼を殺さざるをえなかったと Henry から打ち明けられたことなのだ。そう考えたほうが彼の興奮状態を理解しやすいといえる。

Henry はもうすぐこの世を去ろうとしていることが分かっているから、誰かに真実を話しておきたかったにちがいない。ならば、General Compson の孫である Quentin は打ち明けるのに最も適した人物だと思われたのだ。もうひとつの可能性として Henry からその秘密を聞いた Miss Rosa が帰りの馬車のなかでそれを Quentin に話したとも考えられるが、同時代を過ごしたとはいえ、歴史の証人としては高齢の彼女よりも若い Quentin が選ばれたと考えるほうが自然である。やはり Quentin が第三者ではなく Henry からそれを直接聞いたと判断するのが一番すなおな解釈だといえる。だから Bon は自分に黒人の血が流れていることを知っていたのであり、その時期は戦争の末期、彼が Judith に手紙を書いたときよりも後のことなのである。

Bon が自分に黒人の血が流れていて、父親が Sutpen であると知っていたとすれば、その後の彼の行動は理解しやすい。Judith に送った手紙が示すように、彼は彼女を愛していた。だから、彼は黒人の血がはいった自分が近親相姦まで犯すことになる結婚をしようとすれば、Judith を悲しませるだけだと

考える。彼はその秘密が分かった時点で、結婚をあきらめたのだ。Judithをほんとうに愛した彼には絶望があるだけだ。彼は死を望んだにちがいない。彼は、まじめな Coldfield 家の気質を受け継いだ Henry の性格を Sutpen と同じように、よく理解していたはずである。Henry の嫌がる結婚を強行しようとするれば、彼がどう対処するかは Bon には手にとるように分かる。だから、結婚を強行する姿勢を見せて、Henry に危機感を抱かせ、自分を殺させるようにしむけたのだ。

だが、それだけではない思いが Bon にはあったと考えられる。なぜなら北部で生産されて一年もたっていないストーヴの磨き粉を見て、自分たちの必需品にもこと欠く惨状と北部の生産力の余裕をユーモラスに比較することで、南部の敗北を予想する能力を彼は備えているからだ。とうぜん自分を殺させることは Henry には残酷な結果をもたらし、Judith をも悲しませることになるというくらいのことは、彼には分かるはずである。それでも自分を殺させようとしたのは、黒人ということで徹底的に自分を無視した Sutpen に報復しようとする気持ちのほうがその自制心よりはるかに強かったのだ。なにしろ、Quentin と Shreve の想像だが、彼は Sutpen が「私がおまえの父親だ。これを燃やせ」と書くだけでいい、そうしたらそのとおりにするだろう、それが駄目なら、< Charles >と一字を書いた紙切れ、あるいは毛髪か爪を送ってくればいい、それで意味が分かるから、と痛切な想いで四年間待ったのだが、彼は Sutpen からなんの連絡も受けなかったのだ。(326) それだけに彼は黒人ということが、それほど悪いのかという無念の気持ちをつよく抱かざるをえなかったのである。愛を失い、黒人であることを意識して戦後とはいえ人種差別の厳しい南部で生きていくことに Bon は絶望したのだ。それもまた彼に死を決意させた理由のひとつといえる。

それでも Bon は Judith への愛と Sutpen への憎しみは別だと考えて、Judith を悲しませないように、彼女が自分の写真をいれて彼に送った金属のケースのなかの彼女の写真を入れ替えたのだ。そこに彼の黒人の愛人と息子の写真をいれたのは、Shreve が Quentin と一緒に想像するように自分とはとんでもな

い悪い奴だから、自分のことは忘れてほしいという彼の思いやりのメッセージなのだ。こうした一連の流れはまさしく Sutpen が考えていたことである。後継者を失うことで自分の計画を破綻させてまでも、彼は自分にとっての良心を、農場主一族には黒人の血が入ってはいけないという南部の規範をイノセントに守ろうとしたのである。

三度目に Sutpen が計画遂行の判断を誤ったのは、彼が戦争から帰還した後のことである。彼はみたび意志と勇気と賢さを備えていると信じて、荒廃した農場の再建に必死に取り組む。59 歳になった彼には時間があまり残されていないから、その努力は狂気の様相をおびる。だが彼が西インド諸島からつれてきた黒人たちはみな農場を去り、残っているのは老いた雇い人、あの貧乏白人の Wash Jones だけであれば、その結果は明らかである。それでも彼が計画の達成に励むのは、いったん決めたことはあくまでもやり遂げるという、あのイノセンスのためである。彼は農場を昔の姿に戻そうと奮闘するが、その復興は微々たるものである。Miss Rosa はこう観察している、「彼はこの世を去る日までに、百平方マイルのうちどのくらいの土地を農地にして管理し、自分のものと呼べるのか、そしてたとえ彼の身になにがあっても、Sutpen 百平方マイル農場の形骸くらいは維持できそうだが、Sutpen 一平方マイル農場と呼んだほうがふさわしくても、ということをはっきり分かっていたのです」と。(168) 農場が百分の一に縮小してもまだ彼は後継者が必要だと考える。¹⁷ その想いが Miss Rosa と婚約をさせ、平然として試みに子供を生んでみて、その子が男の子なら結婚しようといわせるのだ。その結果彼は彼女と後継者を得る可能性をうしなう。さらに、その後 Wash Jones の孫娘 Milly に子供を生まれ、その子が女兒だと分かると、非情にも彼女を捨てる。彼は農場と後継者のことしか頭にないから、自分の行動が他人をどれほど傷つけるか分かっていない。

一方 Milly の祖父は孫娘が Sutpen の子供を生んだことを、貧乏白人の身分から抜け出すよい機会だと考えていた。しかも相手は神のように尊敬していた彼の雇い主である。彼は戦後の混乱のなかで Sutpen とともに羽ばたいてい

こうと思っていたのだ。だが Sutpen が孫娘と生まれた子を弊履のごとく棄て去るのを見て、望みが完全に打ち砕かれたと悟ったとき、彼の尊敬は殺意へとかわる。Miss Rosa によれば、Sutpen は「最後に錆びた草刈用の大がまの一撃のなかに計画からの解放（休息や平安ではないとしても）を見いだした」というのである。(171-2) 彼の思い込みの激しさは死ぬ以外に彼をその計画から解き放つことはないのだ。Miss Rosa は彼のイノセンスの本質をよく見極めていたといえる。

結局 Sutpen はあの農場主の玄関で猿のような黒人の召使から裏口に回るようにいわれたあの少年時代以来、まったく変わっていなかったのである。その意味では 59 歳になってもまだ彼は一度思い込んだらそれを絶対変えないという意味で、イノセントのままであったのだ。トラウマとなったあの事件のあと彼は計画実現のために南部社会の規範を受け入れたが、それを最後まで守りぬこうとしたことがついに彼に死をもたらし、彼の計画を破綻させたといえる。

IV. 結論

この作品は Sutpen の野望がついえる経過を詳細に描いているが、さらに子孫にまで彼の悪行の影響がおよぶ過程をも明らかにする。Henry は逃亡生活を強いられ、Judith は Clytie とともに、戦後の悲惨な状況のなかで辛酸をなめさせられる。だが焦点は Bon の子孫に当てられる。作者は、かれらの人生をとおして、奴隷制度を保持した南部社会の考え方がひとりの男にあたえた影響をなおも追求しようとする。そこに南部社会の本質的な問題があると彼は考えるからだ。

そこで Bon の息子 Valery Bon は、外見は白人という、アイデンティティを確立しがたい特徴を与えられ、本来の人種として認められない苦しみを味わわれる。彼は黒人の荷役人足や水夫には白人と見られるため、それを否定するとさらに彼らの確信をつよめてしまう。一方白人には自分は黒人だとい

うと肌の色のために嘘をついていると思われる。このように彼の人種的立場は意識と大きな落差がある。彼の成長過程は、JudithやClytieの、冷たいところはあってもかもしれないが、配慮のある世話を受けて、表面上は不幸ではない。それでも、彼女たちと一定の距離をおこうとするのは、彼が自分には黒い血が流れていることを知っていたからである。だから黒人たちと付き合うのだ。彼が「石炭のように黒い、猿のような女」と結婚するのは、自分が黒人であるというアイデンティティを世間に明示するためである。(205) このように黒人だと自己確認をしても、南部社会で黒人であることの屈辱、その一方で肌の色のために黒人に受け入れられない苦しみという、二重の苦悶が彼にはたえず付きまとう。彼は絶望感にとらわれ、Sutpenのイノセンスを彷彿とさせる徹底した反抗的な態度をとることで自分の宿命を告発せざるをえない。それが彼に繰り返し暴力沙汰に訴えるという行為をとらせることになる。まさに、彼の生活は、Mr. Compsonが想像するように、「彼が自分で決めて創りだしたゲッセマネへの道、彼が自分を十字架にかけ、一瞬それをはずして、またそこへ戻っていった」というような苦難にみちている。(209) そしてアルコールに救いを求めざるをえなくなり、その荒んだ生活のなかで黄熱病に罹って生涯をとじる。その病は彼の看病をしたJudithをも死なせ、その後彼の息子、つまりSutpenの曾孫Jim Bondが白痴だという事実が明らかになってみれば、一家の悲運はここに極まった感がある。だが過酷な運命はそれだけでは終わらない。逃亡から戻って屋敷の二階に病んで隠れていたHenryを町の病院に移そうと、Miss Rosaが救急車を要請する。だがClytieは彼を逮捕するためにやってきた警察の車だとそれを勘違いして、白痴のJim Bondに命じて屋敷に火をつけさせる。その炎のなかでHenryとClytieはみずから生を終える。だが、その白痴はどこかに姿を消してしまう。

生き残るのは、Sutpenがあれほど黒い血を家に入れるのを阻もうとした黒人でしかも精神遅滞者だけなのだ。ここまで徹底的にSutpenの子孫の悲惨な末路を描くのは、Faulknerが南部の奴隷制度やそこから生まれた人種差別を不条理だと考えているからにほかならない。それはQuentinが、「あの戦争の

敗因が神意である理由を人びとにやっとう理解してもらうために、Miss Rosa が自分に話を聞いてほしいと思っている」と想像するところにも、(11) また Shreve と Quentin の想像のなかで、Henry が「神が四年前に私たちを見捨てたから、私たちには名誉も誇りも神もないのです」といっているところにも見て取れる。(354) このように南部社会の罪の根源、言い換えれば黒人を搾取した南部の過去の罪業は衰退した南部の現状を知るためにも探求しなければならない課題となる。そのために Sutpen という人物が南部の過去に生み出されたのだ。過去を甦らせる手法は時間を取り戻すことである。

「時間は決まったものではない、時間はある意味でその瞬間に生きているすべての人たちが結集して創り出した知性なのだ」と作者は考えるから、何人もの登場人物たちに Sutpen 一家についてそれぞれの考えを述べさせる。¹⁸ それがこの小説の時間である。つまりある時代を生きた人たちの意思を Quentin と Shreve が、あるいは Mr. Compson や Miss Rosa がそれぞれ創造することが時間なのである。その思考は時間のなかを瞬時に飛び交うから、何重もの時間の層が現れる。人の深層心理はまさしくそのように動くから、より鮮やかに Sutpen 一家の状況が多重に描き出される。それがこの作品の構成であり、登場人物たちの意識が交錯する理由である。

うずら狩の場面を例に挙げると、寮の部屋で Shreve から狩について質問される現在という時間がある。その問いかけによって、Quentin はそのとき父親とふたりで訪れた Sutpen 家の墓地のこと、それから父親が語った Sutpen 家の由来を思い出す。父親によると、Judith と Clytie が Bon の息子 Valery を引き取るが、成長するにつれて彼が荒れ狂って暴力沙汰を繰り返すため、Judith と彼がどんな会話を交わしたのか分からない、ということだった。そのとき Quentin は、Judith が Valery Bon に妻子の面倒をみるから、問題なく白人としてとおる北部の都会へ行っってはどうかと話す場面を想像する。ここには、寮にいる現在、うずら狩の折に訪れた墓地が表す過去、さらにそこで父親が話すそれより以前の Sutpen 家の過去、そしてそのとき Judith と Valery Bon が会話をするとする Quentin の想像がある。つまり三層の時間があり、

想像によって描出された心理的時間を含めると、この場面には四層の時間が示されているのである。¹⁹ こうした多層の時間のなかから、どの時間が Sutpen の過去に一番ふさわしいかを考えるように読者は求められる。それぞれの読み方がそれぞれの Sutpen 家の過去、つまり南部の過去を創り出すことになる。そこにこの作品の奥の深さと難解さがある。

その時間を探求した結果 Shreve は、「やがて Jim Bond のような人たちが西半球を征服することになると思う。もちろんぼくたちの時代にはそんなことにはならないさ、そしてもちろん、彼らが南北両極にむかって増えていくにつれて、兎や鳥のように白くなっていくのさ、そうなると雪にもそれほど目立たなくなるだろう」と人種問題について人種混合が続く、という結論をだす。(378) やがて人種をめぐる争いが終結するというのである。それは、論理性がなく、希望的観測が強く、一見真摯な結論といえるのかという疑問がわく。しかし、その結論は、Sutpen の人種差別意識がもたらした悲劇を Quentin とともに話し合った結果、Shreve が辿りついた歴史的必然を意味している、と考えた方がよい。

もともと Shreve は南部を知りたいと思っていて、Quentin に「南部について話してくれ。そこはどんな所なのだ。そこではどんな生活をしているのだ。なぜそこで生活しているのだ。いったいなぜ生きているのだ」といっている。(174) ここの四つの疑問文には疑問符がついていない。それは疑問文というよりも冒頭の命令文に吸収されて、話してほしいという願望そのものを表しているからだ。それほど南部は Shreve にとって好奇の対象になっていたのである。その知りたかった南部について理解したとき、彼が無意味な結論を言うはずがない。それに、そうでなければ寒い寮の一室で、Quentin の口からではあるが、これほど多くの人たちの話を聞き、長い時間をかけて南部の本質について話しあった意味がなくなるからである。

最後に、Quentin は Shreve に「どうしてきみは南部を憎んでいるんだい」と尋ねられると、彼は急いで憎んでいないと答え、憎んではないと想い続ける。(378) そこに Quentin の苦悩が示されている。彼と Shreve がこの物語

を紡ぎ終えたとき、彼が「亡くなった多くの人たちよりも20歳にしてはくの方がずっと年を取っている」というのは、南部の悲劇を再現する作業があまりにも重い体験であったからだ。(377) 作者は「Shreveは話に真実を加味する解説者だった。Quentin だけにこの話をさせていたら、それは真実とはまったくかけ離れたものになっていただろう」といっているが、その言葉に悲惨な事実を直視できない身内としての Quentin の意識をみることができる。²⁰ また、そこに Quentin の、そして Faulkner 自身の南部にたいするアンビヴァレントな想いを窺い知ることができる。それほど奴隷制度や人種差別といった南部社会の罪は重いということなのだ。Faulkner は Sutpen の物語によって南部の苦しみと罪過を明らかにしようとしたといえる。

——了——

本論はテキストとして Faulkner, William. *ABSALOM, ABSALOM!* London: Chatto and Windus, 1969. (The Collected Works of William Faulkner) を用いた。引用文の後のカッコ内の数字はすべてこの版の頁数を示す。

本論で引用した原文の翻訳は筆者の訳である。『アブサロム、アブサロム!』は富山房からフォークナー全集12として恩師・故大橋吉之輔の名訳が出版されており、本来はこの訳を掲載すべきではあるが、論文の場合には自分の訳を示すのが必要な姿勢だと考え、敢えて拙訳を載せたことをおことわりしておく。なお作品解釈にあたって、師の労作には多くの示唆を受けたことを明記して、改めて亡き師に感謝を表したい。

また本論は慶應義塾大学2001年度秋学期の特別研究休暇のおかげで、大部分が完成したことを記し、その機会が与えられたことに謝意を表したい。

注

1. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1995), p.273.
2. *Ibid.*, p. 274.
3. *Ibid.*, p. 273.
4. *Ibid.*, p. 274.
5. Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven: Yale University Press, 1974), p. 429.
6. Dirk Kuyk, Jr., *Sutpen's Design* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1990), p. 19.
7. James H. Justus, "The Epic Design of *Absalom, Absalom!*" *William Faulkner's ABSALOM, ABSALOM!: A Critical Casebook*, ed., Elisabeth Muhlenfeld (New York: Garland, 1984), p. 40.
8. Noel Polk and John D. Hart eds., *ABSALOM, ABSALOM! : A Concordance to the Novel* (The Faulkner Concordance Advisory Board, 1989), pp. 183 and 205-206.
9. *Faulkner in the University*, p. 35.
10. *Ibid.*, p.35.
11. *Sutpen's Design*, p. 17.
12. Noel Polk, *Children of the Dark House* (Jackson: University Press of Mississippi, 1996), pp. 139-140.
13. David Paul Ragan, *William Faulkner's ABSALOM, ABSALOM!: A Critical Study* (Ann Arbor: UMI Research Press, 1987), p. 60.
14. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*, p. 299.
15. Elisabeth Muhlenfeld, "'We have waited long enough': Judith Sutpen and Charles Bon" *William Faulkner's ABSALOM, ABSALOM!: A Critical Casebook*, pp. 180-182.
16. *Faulkner in the University*, p. 79.
17. テキストの163頁には、Sutpenは十マイル四方を完全な農地にしていたと書かれている。だが、Sutpen農場の衰退は事実だから、ここでは引用している記載のほうを採択する。こうした細かな事実の違いはいくつか見られる。例えば、Millyは

171 頁では Wash Jones のひとり娘となっているが、他では孫娘である。Charles Bon の息子はテキストでは Valery Bon であるが、巻末の家系図では Velery Bon となっている。Sutpen の年齢は 1865 年 59 歳となっているが、1823 年に彼が 13, 4 歳であると書かれているから、彼が生まれた年は 1809 か 1810 年であるとすれば、1865 年は 55 か 56 歳のはずである。一方、家系図には Sutpen は 1807 年生まれと記されている。この場合は 1865 年に彼は 58 歳ということになる。だが、こうした事実の相違はささいな瑕疵であって、作品の価値を傷つけるものではない。それだけこの小説が複雑であるということなのだ。

18. *Faulkner in the University*, p. 139.

19. もう一例として六章の冒頭を取り上げると、事実として Shreve と Quentin は 1910 年 1 月ハーヴァードの寮の一室にいる。机上には父親が Miss Rosa の死を Quentin に知らせた手紙が入っている封筒がある。その白い封筒は Quentin に約半年前の九月の深夜 Miss Rosa と馬車で Sutpen 屋敷へ行ったことを思い出させる。そこで Quentin が、Rosa は Aunt ではなく Miss Rosa なのだと説明しなければならない現在がさし挟まれる。その現在の時間のなかで Quentin は Cambridge に来てから、南部はどんな所なのだと Shreve やその他の人たちに話しかけられた記憶が挿入される。つまり時間はここで、事実としての現在、五か月前の九月の思い出、Shreve に説明している現在、さらに現在から入学当初の過去というように三層の時間がわずかに二頁弱の文章のなかで使い分けられている。

20. *Faulkner in the University*, p. 75.

参考文献

1. Faulkner, William. *ABSALOM, ABSALOM!* London: Chatto and Windus, 1969. (The Collected Works of William Faulkner)
2. Gwynn, Frederick L. and Blotner, Joseph L. eds. *Faulkner in the University*. Charlottesville: University of Virginia Press, 1995.
3. Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale University Press, 1974.

4. -----, *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*. New Haven: Yale University Press, 1978.
5. -----, *William Faulkner: First Encounters*. New Haven: Yale University Press, 1983.
6. Ragan, David Paul. *William Faulkner's ABSALOM, ABSALOM!: A Critical Study*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1987.
7. Muhlenfeld, Elisabeth. ed. *William Faulkner's ABSALOM, ABSALOM!: A Critical Casebook*. New York: Garland Publishing, 1984. (Garland Faulkner Casebooks, Vol. 4)
8. Kuyk, Dirk, Jr. *Sutpen's Design: Interpreting Faulkner's Absalom, Absalom!* Charlottesville: University Press of Virginia, 1990.
9. Polk, Noel and Hart, John D. eds. *ABSALOM, ABSALOM!: A Concordance to the Novel*. The Faulkner Concordance Advisory Board, 1989. (The Faulkner Concordances, 11)
10. Vickery, Olga W. *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1964.
11. Singal, Daniel J. *William Faulkner: The Making of a Modernist*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1997.
12. Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: University of Texas Press, 1990.
13. Baker, Charles. *William Faulkner's Postcolonial South*. New York: Peter Lang Publishing, 2000.
14. Rollyson, Carl E. Jr. *Uses of the Past in the Novels of William Faulkner*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1984.
15. Volpe, Edmond L. *A Reader's Guide to William Faulkner*. New York: Noonday Press, 1967.
16. Polk, Noel. *Children of the Dark House*. Jackson: University Press of Mississippi, 1996.
17. Ragan, David Paul. annotated. *ABSALOM, ABSALOM!* New York: Garland Publishing, 1991. (The Garland Faulkner Annotation Series, 6)
18. Brown, Calvin S. *A Glossary of Faulkner's South*. New Haven: Yale University Press, 1977.

*Synopsis***William Faulkner's *Absalom, Absalom!*:****The Evil of the Old South Described through the
Collapse of Sutpen's Design****Yoshitaka Naruse**

Sutpen's motive for acquiring the status of a big planter is based on his humiliating experience in his boyhood: he was told to go to the back door by an "ape-like" black servant. It seems to readers that his final object is to get land, blacks and a big house to spend such a comfortable life, lying in a hammock and being served drinks by a black servant. He explains, however, that his definite design is not to become a planter but to accept in his house both strange, poor orphans like himself and their descendants. Thinking of his demonic behavior, we can not help doubting whether his words are true. The circumstances in which he told the design to General Compson give us a clue to the answer to this question. At that time he came home on a day's leave during the War, and visited General Compson at the office to get advice as to why his design fell short of success. The conditions were too urgent to allow him to exaggerate his story or pretend to be a good person. His story, therefore, is considered true, even though he never welcomed any orphan after his success. Another reason is that he is so much larger than life that ordinary people find him difficult to understand. People ascribe to him such different and contradictory attributes as the demonic and the philanthropic.

One of the most important characteristics of Sutpen is his innocence.

This is different from the quality usually seen in American literature which means that a young man has lost his purity through experiences in a dirty, real society. In this novel it signifies his strong personality: he never changes his mind once he has made a decision to do something, and in other words nothing but his death can prevent him from achieving his design. This earnestness denotes the content of his innocence. It leads him to his success as a planter, while it also forces him to fail in his design. Once he believes in the code of the Old South that planters must not have a drop of black blood, he adheres to that code to the letter and to the end.

The idea he accepts innocently compels him to lose the design: he has to leave his wife and son whom he has thought indispensable for his design when he becomes aware of her faint possession of black blood, and also he can not allow Judith's marriage to Bon proposed by Henry, because of his secret identification of Bon with his son with black blood. Moreover, he deserts Milly when he finds his baby female, because he wants to get a male successor. This selfish deed makes her grandfather angry to the extent that he murders Sutpen, because he has to give up his ambition to climb a social ladder, utilizing his position as a relative by marriage. His innocence impels him to run wildly toward the achievement of his design, which leads him to death.

Faulkner uses only the word "design", not "dream", referring to the aspiration Sutpen himself talks about. That is because the author does not only think that Sutpen's aim is concrete like land, blacks and a big house, not ambiguous like a dream, but also that the position of Southern planters based on black slaves is absolutely different from any dream associated with a romantic yearning. In other words, he has a sense of guilt about the sins of the Old South so intense that he could not use the word dream when describing Sutpen's ambition.

Time is the sum of intelligence which all people who live at that moment combine. The author, therefore, makes many characters describe their thoughts about the Sutpens. That is the meaning of time in this novel. In other words, time is that Quentin and Shreve, Miss Rosa, or Mr. Compson each creates in their imagination the idea and deed of people who lived in some period. Since their imagination jumps freely here and there in time, there appears several layers of time in one scene. Because Faulkner's stream-of-consciousness technique mimics the workings of the human mind, the circumstances of the Sutpens are represented more vividly. This is the structure of the novel and the reason characters' consciousness is shown changing as they recall incidents in Sutpen's life one after another, jumping back and forth in time.

Making use of this time, Faulkner tries to search for what the South is through various descriptions of a figure who accepts the Southern code and considers segregation right innocently. The Old South depicted in the story is extremely tragic and at the same time sinful, as is demonstrated by the detail that the only survival of Sutpen's descendants is an idiot with black blood. That indicates Faulkner's realization of the Old South, because he thinks that a society supported by slavery and segregation should be absurd and unacceptable. He makes an attempt to manifest not only the agony the South has experienced but also the evil of the Old South through the rise and fall of Sutpen.